

家族および社会関係が エイジズムに及ぼす影響についての考察

関 根 薫

1. はじめに

近代化以降の生産性至上主義といえる現代社会においては、Cowgill が指摘するように、高齢者の地位と権威の低下がもたらされており¹⁾、必ずしも年齢を重ねることが肯定的に捉えられない状況となっている。Butler は、エイジズム（高齢者差別）を「高齢者を高齢であるという理由で系統的に類型化し、差別する過程」と定義し、固定観念や軽蔑・嫌悪、接触回避といった個人レベルのみならず、住宅、雇用、各種サービス分野での差別的慣習など、制度レベルにも現れる（広範囲にわたる）現象として捉えこの問題の深刻さを指摘している²⁾。

近年、こうしたエイジズムに対して、その要因を明らかにしようとする実証的研究が蓄積されてきている。主要な研究としては、Palmoreらによる加齢に対する知識量からエイジズムを捉えようとする研究³⁾や、Semantic Differential (SD) 法⁴⁾による老人イメージの分析など、主に高齢者に対する認知成分（誤った知識、否定的なステレオタイプや信念など）に関する研究があげられる。他方、Fraboni が開発した「Fraboni エイジズム尺度」(Fraboni Scale of Ageism : FSA) を用いた、高齢者に対する感情成分（敵対・差別的態度、接触回避等）をも含めた研究⁵⁾も行われてきている。国内においても日本語版 Fraboni エイジズム尺度を用いた要因分析が試みられており⁶⁾⁷⁾⁸⁾、個人の諸属性、身近な高齢者の有無、高齢に対する知識量、生活満足度などとエイジズムが有意な関係にあることが明らかにされている。但し、日本ではこの FSA 尺度を用いた実証的研究の蓄積が未だ少なく、多様な独立変数を用いたエイジズ

ムの要因分析が十分に行われているとはいえない状況にある。

そこで本稿では、エイジズムの規定要因を解明する意図から、40歳以上の男女2,000人を対象に量的調査を実施し、社会関係（人的ネットワーク・所属団体）、ならびに家族関係（夫婦関係・祖父母－孫関係）がエイジズムに及ぼす影響について考察することを目的とする。

2. 調査の概要

（1）調査期間・対象・方法

本調査は、自計式調査票を用い、東海4県（岐阜県、静岡県、愛知県、三重県）に居住する満40歳以上の男女個人2,000名を対象に郵送法で実施した。調査期間は、2014年1月31日～3月5日である。調査対象者の抽出および調査の実施については、一般社団法人中央調査社に委託し、個人マスターサンプルより層化抽出した。具体的な方法は、東海4県（岐阜、静岡、愛知、三重）に居住する40歳以上男女の推定母集団を算出し、「政令指定都市（名古屋市、静岡市、浜松市）」「その他の市」「町村」の人口比率に合わせて、40歳以上を10歳階級別に2,000サンプル抽出した。有効回答数は1,063ケース（有効回答率53.2%）であった。

調査対象者を40歳以上に設定した意図は、先行研究において特に中年期以降にエイジズムが高まることが指摘されている点、また自らの加齢と老化を主体的に理解し始めるとともに、社会活動においても中心的な地位と役割を担い始める世代と考えたことによる。

（2）本調査で設定した調査項目

本調査に用いた調査項目を簡単に説明すると、①調査対象者の属性（性別、年齢、居住地区、婚姻状況、学歴、職業）についての項目、②社会関係（人的ネットワーク、所属団体の有無）を測定する項目、③家族関係（夫婦関係、祖父母-孫関係）を測定する項目といった3分野の設問を設定し回答を求めた。

(3) 尺度について

本分析では、原田らが開発した日本語版 FSA（以下 FSA とする）を用いてエイジズムの測定、および要因分析を試みた（表 1）。各質問項目に対して、「1. そう思わない」に 1 点～「5. そう思う」に 5 点を与え単純加算して合成変数を作成し従属変数として用いた⁹⁾。

表 1. 日本語版 Fraboni エイジズム尺度

| 質問項目 |
|-------------------------------------|
| 1. 多くの高齢者はけちでお金や物を貯めている |
| 2. 多くの高齢者は、新しい友人を作ることに興味がない |
| 3. 多くの高齢者は過去に生きている |
| 4. 高齢者と会うと、時々目を合わせないようにしてしまう |
| 5. 高齢者が私に話しかけてきても、私は話をしたくない |
| 6. 高齢者は、若い人の集まりによばれた時には感謝すべきだ |
| 7. もし招待されても、自分は老人クラブの行事に行きたくない |
| 8. 個人的には、高齢者と長い時間を過ごしたくない |
| 9. ほとんどの高齢者は運転免許を更新すべきではない |
| 10. 高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない |
| 11. ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を信頼して任すことができない |
| 12. 高齢者は誰にも面倒をかけない場所に住むのが一番だ |
| 13. 高齢者とのつきあいは結構楽しい（逆転項目） |
| 14. 最近日本の高齢者の苦しい状況をきくと悲しくなる（逆転項目） |
| 15. 高齢者が政治に発言するよう奨励されるべきだ（逆転項目） |
| 16. ほとんどの高齢者はおもしろくて個性的なひとたちだ（逆転項目） |
| 17. できれば高齢者と一緒に住みたくない |
| 18. ほとんどの高齢者は、おなじ話を何度もするのでイライラさせられる |
| 19. 高齢者は若い人より不平が多い |

13～14 は逆転項目。

3. 結 果

(1) 基本属性

有効回答のうち「男性」は45.9% (N=488), 「女性」は54.1% (N=575) であった。年齢に関しては、「40～49歳」が20.1% (N=214), 「50～59歳」が21.7% (N=231), 「60～69歳」が27.5% (N=292), 「70～79歳」が22.9% (N=243), 「80歳以上」が7.8% (N=83) となっている。居住地については、「政令指定都市

表2. 基本属性

単位：%, () 内実数

| 性 別 | | 婚姻状況 | |
|---------|------------|----------------------------|------------|
| 男性 | 45.9 (488) | 既婚 | 86.1 (910) |
| 女性 | 54.1 (575) | 離別・死別 | 10.4 (110) |
| 年齢階層 | | 未婚 | 3.5 (37) |
| 40～49 歳 | 20.1 (214) | 最終学歴 | |
| 50～59 歳 | 21.7 (231) | 中学校 (旧制小学校) | 14.0 (149) |
| 60～69 歳 | 27.5 (292) | 高校 (旧制中学校・高等女学校・実業学校・師範学校) | 45.6 (485) |
| 70～79 歳 | 22.9 (243) | 各種専門学校【高卒後】 | 7.0 (74) |
| 80 歳以上 | 7.8 (83) | 短大・高専 (旧制高校・専門学校・高等師範学校) | 12.7 (135) |
| 居住地 | | 四年制大学 (旧制大学) | 18.4 (196) |
| 政令指定都市 | 27.8 (296) | 大学院 | 1.8 (19) |
| その他の市 | 64.4 (685) | その他 | 0.2 (2) |
| 町村 | 7.5 (80) | 積極的に参加・活動している団体・組織 | |
| 職業の有無 | | 有り | 78.8 (820) |
| 有職 | 60.0 (634) | 無し | 21.2 (221) |
| 無職 | 40.0 (423) | | |

(名古屋市, 静岡市, 浜松市)」が27.8% (N=296), 「その他の市」が64.4% (N=685), 「町村」が7.5% (N=80) と, 「その他の市」の割合が最も高い. 社会関係が形成される場となりうる, 積極的に参加・活動している所属団体については, 「有り」が78.8% (N=820), 「無し」が21.2% (N=221) と 8 割弱の人が何らかの団体に参加し積極的に活動している (表2).

(2) 性・年齢とエイジズム

1) 性別による t 検定

性別によりエイジズムの強さに差があるか否かを確認するために, FSA 合成変数を従属変数に設定した t 検定を行った (表3). その結果, 平均値では, 男性の方が1.3466高くエイジズムが強い傾向が認められ, t 検定でも男女間に5%水準で有意な差が認められた.

表3. 性別による t 検定

| 性別 | 平均値 | t 値 | 自由度 | 有意確率 |
|----|---------|--------|-----|------|
| 男性 | 46.3391 | 2.3373 | 997 | .020 |
| 女性 | 44.9925 | | | |

2) 性・年齢階層別分散分析および多重比較

性・年齢階層別にエイジズムの強さに差があるか否かを確認するために、FSA 合成変数を従属変数に設定した分散分析および多重比較検定 (Tukey HSD) を行った (表4)。その結果、全体では、平均値において、「50～59歳」ならびに「80歳以上」で高い傾向は認められたものの、各年齢階層間での有意差は認められなかった。

他方、男性については、「40～49歳」と「60～69歳」の間で有意差が認められ、平均値は、「60～69歳」の方が高い結果であった。また、女性については、「40～49歳」と「50～59歳」、ならびに「50～59歳」と「60～69歳」の間で有意差が認められ、平均値は、「50～59歳」が最も高い結果であった。

表4. 分散分析および多重比較検定 (Tukey HSD) による FSA の性・年齢階層比較

| 性別 | 年齢 | F値 | 平均値 | 40～49歳 | 50～59歳 | 60～69歳 | 70～79歳 | 80歳以上 |
|----|--------|--------------------|---------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 全体 | 40～49歳 | 2.27 | 44.0521 | | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. |
| | 50～59歳 | | 46.4192 | n.s. | | n.s. | n.s. | |
| | 60～69歳 | | 45.6632 | n.s. | n.s. | | n.s. | |
| | 70～79歳 | | 45.9954 | n.s. | n.s. | n.s. | | |
| | 80歳以上 | | 46.5690 | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | |
| 男性 | 40～49歳 | 2.113 ⁺ | 44.4688 | | n.s. | * | n.s. | n.s. |
| | 50～59歳 | | 45.8190 | n.s. | | n.s. | n.s. | |
| | 60～69歳 | | 47.8898 | * | n.s. | | n.s. | |
| | 70～79歳 | | 46.3529 | n.s. | n.s. | n.s. | | |
| | 80歳以上 | | 47.3333 | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | |
| 女性 | 40～49歳 | 2.841 [*] | 43.7043 | | * | n.s. | n.s. | n.s. |
| | 50～59歳 | | 46.9274 | * | | * | n.s. | |
| | 60～69歳 | | 43.8734 | n.s. | * | | n.s. | |
| | 70～79歳 | | 45.6754 | n.s. | n.s. | n.s. | | |
| | 80歳以上 | | 45.3182 | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | |

** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$ n.s.= not significance

(3) 社会関係とエイジズム

1) 人的ネットワークとの相関

本稿では、個人を取り巻く人的ネットワークのうち、①「同居者以外の親族」、②「近所づき合いのある人」、③「学校等で知り合った人」、④「仕事関係で知り合った人」、⑤「その他のつき合いのある人」の5カテゴリーについて、

各々 a. [日常的に親密につき合っている人の数] (ソーシャル・ネットワークの広さ), b. [いざというときに頼れる人の数] (ソーシャル・サポート・ネットワークの広さ), ならびに c. [最も親しい人との接触頻度] (ソーシャル・ネットワークの強さ) を測定し, 男女別に FSA 合成変数との相関分析を行った (表5).

表5. 人的ネットワークと FSA との相関

| 社会関係 | | a. 日常的に親密につき合っている人数 | | | b. いざというときに頼れる人数 | | | c. 最も親しい人との[接触頻度] | | |
|---------------|------|---------------------|---------|---------|------------------|-------|-------|-------------------|---------|--------|
| | | 全体 | 男性 | 女性 | 全体 | 男性 | 女性 | 全体 | 男性 | 女性 |
| ①同居者以外の親族 | 相関係数 | -.094** | -.088 | -.096* | .048 | .071 | -.006 | -.095** | -.142** | -.038 |
| | 有意確率 | .003 | .061 | .029 | .131 | .129 | .884 | .005 | .005 | .400 |
| | N | 979 | 457 | 522 | 999 | 466 | 533 | 871 | 380 | 491 |
| ②近所つき合いのある人 | 相関係数 | -.107** | -.128** | -.086* | .070* | .078 | .037 | -.144** | -.174** | -.113* |
| | 有意確率 | .001 | .006 | .049 | .028 | .094 | .393 | .000 | .004 | .024 |
| | N | 974 | 454 | 520 | 999 | 466 | 533 | 673 | 274 | 399 |
| ③学校等で知り合った人 | 相関係数 | -.087** | -.045 | -.113* | .041 | .042 | .023 | -.109** | -.106 | -.081 |
| | 有意確率 | .007 | .347 | .011 | .198 | .367 | .593 | .010 | .104 | .139 |
| | N | 951 | 441 | 510 | 999 | 466 | 533 | 566 | 235 | 331 |
| ④仕事関係で知り合った人 | 相関係数 | -.031 | -.012 | -.092* | .057 | .100* | -.005 | -.070 | -.140* | -.007 |
| | 有意確率 | .339 | .804 | .038 | .074 | .030 | .914 | .078 | .016 | .900 |
| | N | 957 | 452 | 505 | 999 | 466 | 533 | 631 | 294 | 337 |
| ⑤その他のつき合いのある人 | 相関係数 | -.143** | -.111* | -.176** | .056 | .076 | .016 | -.059 | -.042 | -.059 |
| | 有意確率 | .000 | .020 | .000 | .077 | .103 | .705 | .176 | .534 | .294 |
| | N | 950 | 445 | 505 | 999 | 466 | 533 | 532 | 218 | 314 |

** $p < .01$ * $p < .05$

その結果, ①「同居者以外の親族」については, 男性において c. [最も親しい人との接触頻度] と FSA 合成変数との間に, 他方女性では, a. [日常的に親密につき合っている人の数] との間に有意な負の相関関係が認められた. ②「近所つき合いのある人」については, 男女ともに a. [日常的に親密につき合っている人の数] ならびに c. [最も親しい人との接触頻度] との間に有意な負の相関関係が認められた. ③「学校等で知り合った人」については, 女性のみ a. [日常的に親密につき合っている人の数] との間に有意な負の相関関係が認められた. ④「仕事関係で知り合った人」については, 男性において b. [いざというときに頼れる人の数] ならびに c. [最も親しい人との接触頻度] との間に, 女性では, a. [日常的に親密につき合っている人の数] との間に有意な負の相関関係が

認められた。最後に⑤「その他のつき合いのある人」については、男女ともに a. [日常的に親密につき合っている人の数] との間にのみ有意な負の相関関係が認められた。

以上のように、有意な関係が認められたいずれの相関も負の相関であり、人数あるいは接触頻度が高まるにつれエイジズムが弱まる傾向にあった。

2) 所属団体・組織との関係

個人をとりまく社会関係は、所属団体を通じて形成されることも多い。そこで、積極的に参加・活動している所属団体の有無を独立変数に、FSA 合成変数を従属変数に設定した t 検定により、平均値の差を男女別に確認したところ(表 6)、男性の平均値は、「有り群」46.0774, 「無し群」46.9339 と「有り群」の方が低い傾向がみられたものの、統計的に有意な差は認められなかった。他方、女性の平均値は、「有り群」44.5977, 「無し群」47.3111 と「有り群」の方が値は低く、かつ 1%水準で統計的な有意差も認められた。この結果より、女性については、積極的に参加・活動している所属団体を有している方がエイジズムが弱まる傾向にあった。

表 6. 積極的に参加・活動している団体の有無による t 検定

| 積極的に活動している 団体・組織 | | 平均値 | t 値 | 自由度 | 有意確率 |
|---------------------|-----|---------|----------|-----|------|
| 全体 | 有り群 | 45.2425 | - 2.6312 | 980 | .009 |
| | 無し群 | 47.0948 | | | |
| 男性 | 有り群 | 46.0774 | -.878 | 455 | .381 |
| | 無し群 | 46.9339 | | | |
| 女性 | 有り群 | 44.5977 | - 2.631 | 523 | .009 |
| | 無し群 | 47.3111 | | | |

(4) 家族関係とエイジズム

1) 夫婦関係との相関

夫婦関係の測定にあたっては、①「日常の出来事などを普段からよく話している」(会話の頻度)、②「(配偶者に)自分の考えや悩みについてよく話している」(自己開示度)、③「配偶者の心配事や悩みを聞いている」(配偶者に対する

受容度), ④「(配偶者は) あなたの心配事や悩みを聞いている」(配偶者からの受容度), ⑤「配偶者の能力や努力を評価している」(配偶者に対する肯定的評価), ⑥「(配偶者は) あなたの能力や努力を評価している」(配偶者からの肯定的評価), の6項目を設定した。各々の項目については, 「1. そう思わない」(1点) ~ 「5. そう思う」(5点) の5件尺度で測定している(表7)。

表7. 夫婦関係とFSAとの相関

| 夫婦関係 | | 全体 | 男性 | 女性 |
|------------------------------|------|---------|---------|---------|
| ① 日常の出来事などを普段からよく話している | 相関係数 | -.126** | -.130** | -.136** |
| | 有意確率 | .000 | .009 | .004 |
| | N | 856 | 407 | 449 |
| ② (配偶者に) 自分の考えや悩みについてよく話している | 相関係数 | -.135** | -.076 | -.188** |
| | 有意確率 | .000 | .124 | .000 |
| | N | 856 | 406 | 450 |
| ③ 配偶者の心配事や悩みを聞いている | 相関係数 | -.130** | -.083 | -.184** |
| | 有意確率 | .000 | .095 | .000 |
| | N | 854 | 405 | 449 |
| ④ (配偶者は) あなたの心配事や悩みを聞いている | 相関係数 | -.135** | -.103* | -.178** |
| | 有意確率 | .000 | .039 | .000 |
| | N | 856 | 406 | 450 |
| ⑤ 配偶者の能力や努力を評価している | 相関係数 | -.186** | -.192** | -.189** |
| | 有意確率 | .000 | .000 | .000 |
| | N | 857 | 408 | 449 |
| ⑥ (配偶者は) あなたの能力や努力を評価している | 相関係数 | -.149** | -.145** | -.167** |
| | 有意確率 | .000 | .003 | .000 |
| | N | 854 | 406 | 448 |

** $p < .01$ * $p < .05$

以上の夫婦関係に関する6項目とFSA合成変数との相関関係を男女別に確認したところ, ①「日常の出来事などを普段からよく話している」については, 男女ともに1%水準で有意な負の相関関係が認められ, 会話の頻度が多いほど, エイジズムが弱まる傾向にあった。②「(配偶者に) 自分の考えや悩みについてよく話している」については, 女性のみ1%水準で有意な負の相関関係が認められ, 自己開示度が高いほど, エイジズムが弱まる傾向にあった。③「配偶者の心配事や悩みを聞いている」については, 女性のみ1%水準で有意な負の相関関係が認められ, 配偶者に対する受容度が高いほど, エイジズムが弱ま

る傾向にあった。④「(配偶者は)あなたの心配事や悩みを聞いている」については、5%ならびに1%水準で男女ともに有意な負の相関関係が認められ、ともに配偶者からの受容度が高いほど、エイジズムが弱まる傾向にあった。⑤「配偶者の能力や努力を評価している」については、男女ともに1%水準で有意な負の相関関係が認められ、配偶者に対して肯定的に評価しているほど、エイジズムが弱まる傾向にあった。最後に⑥「(配偶者は)あなたの能力や努力を評価している」については、男女ともに1%水準で有意な負の相関関係が認められ、配偶者から肯定的に評価されているほど、エイジズムが弱まる傾向にあった。

以上のように、夫婦関係については、全ての項目においてFSA合成変数との間に負の相関関係が認められ、特に配偶者への肯定的評価、ならびに配偶者からの肯定的評価との相関関係が相対的に強い傾向が認められた。

2) 祖父母-孫関係との相関

祖父母-孫関係については、祖父母のうち最も自身に影響を及ぼした方との関係について、「1.良好な関係ではなかった」(1点)～「5.良好な関係であった」(5点)の5件尺度で測定している。この変数とFSA合成変数との相関関係を男女別に確認したところ、男女ともに1%水準で有意な負の相関関係が認められ、祖父母-孫関係が良好であるほど、エイジズムが弱まる傾向にあった。

表8. 祖父母-孫関係とFSAとの相関

| | | 全体 | 男性 | 女性 |
|------------------------|------|---------|---------|---------|
| 祖父母の中で最も自身に影響を与えた方との関係 | 相関係数 | -.228** | -.177** | -.284** |
| | 有意確率 | .000 | .000 | .000 |
| | N | 837 | 389 | 448 |

** $p < .01$ * $p < .05$

4. 考 察

(1) 基本属性との関係

先述したように、基本属性のうち性別については、「男性」の方がFSA合成変数の平均値が有意に高く、エイジズムが強い傾向がみられた。この結果は、先行研究と一致しており、杉井は、ジェンダーの観点から男性の優位性が影響

を及ぼしている点や、高齢者の性比から差別・排除の対象となる高齢者が女性である割合が高い点などをその理由としてあげている¹⁰⁾。こうした理由に加えて、男性の職業経験を通じた高齢者観が影響していることも考えられる。次に年齢については、女性の方が階層間の差が顕著に現れておりエイジズムは50歳代が最も高いという結果であった。この理由として、50歳代という年齢階層は親世代がちょうど介護等の支援を本格的に必要とする時期であり、その対応等で男性よりも女性の方が高齢者と関わる機会が多く、その接触機会の多さがエイジズムに影響を及ぼしていることが推測される。

(2) 社会関係による影響

社会関係のうち、人的ネットワークについては、5つのカテゴリーにおいて負の相関関係が認められた。特に「近所つき合いのある人」に関しては日常的に親密につき合っている人の数、ならびに最も親しい人との接触頻度が高いほど、また「その他のつき合いのある人」に関しては日常的に親密につき合っている人の数が多いほどエイジズムが弱まる傾向が認められた。そして、こうした人的ネットワークが築かれる場となる「積極的に参加・活動している団体」の有無については、女性において「有り群」の方がエイジズムが弱い傾向にあった。

このように、男女間での違いはみられるものの、人的ネットワークの広さ、ならびに所属団体の有無とエイジズムの関係が認められたが、その理由としては、まず人的ネットワークを築くことができる社交性が高い人ほど、対人関係における受容度も高いことが推測され、高齢者に対する差別・排除意識も低い可能性が考えられる。また、人的ネットワークが広いほど、高齢者との接触機会も増加し、高齢者に対する理解も深まることが推測される。加えて、先行研究では、自尊感情とエイジズムが負の関係にあることが認められており¹¹⁾、より親密なつき合いをしている人からは、自己に対する良好なフィードバックも得られやすく自尊感情の高まりに反比例してエイジズムが弱まることが考えられる。

(3) 家族関係による影響

家族関係のうち、夫婦関係については、男女間で若干の違いはみられるものの、全体では6項目全てと負の相関関係が認められ、夫婦関係が良好であるほどエイジズムが弱まるという結果が得られた。特に、男女ともに有意でかつ相対的に強い相関がみられた項目としては、⑤「配偶者の能力や努力を評価している」、ならびに⑥「(配偶者は)あなたの能力や努力を評価している」があげられ、配偶者に対して肯定的に評価していること、ならびに評価されていることがエイジズムを弱めることに繋がるという結果であった。この理由としては、親密な他者から良好な評価を受けることによって自尊感情ならびに自己受容が高まり、他者に対する差別・排除意識も弱まるというプロセスが推測される。奥村は、自己に対する感情は、他者との比較によって生成されるものであり、自己の中で発見された「望ましくないもの」を受容できない場合は自身が不安や不快を感じるだけでなく、他者の中にもそれを発見し不快を感じ批判・非難するとともに消去しようと躍起になると述べている¹²⁾。したがって、日常的に夫婦関係を通じて、自己に対する評価が高く維持されている場合は、他者への批判・非難も弱まることが考えられ、配偶者間の評価とエイジズムの間に強い相関が示されたものと推測される。

次に、祖父母－孫関係については、男女ともに有意な負の相関関係が認められ、祖父母－孫関係が良好であるほどエイジズムが弱まるという結果が得られた。Palmore は、子どもの頃、あるいはそれ以降に経験した高齢者からの虐待や強い恐怖心の植え付けなどが老人嫌悪の原因になる点を指摘しており¹³⁾、本結果も同様の傾向を示しているといえる。また、祖父母との同居経験の有無によるt検定を行った結果、FSA 合成変数の平均値に有意な差は認められなかったことから、エイジズムへの影響は、高齢者との接触機会よりも、接触した高齢者との関係性こそが重要であると考えられる。

本調査では、祖父母と良好な関係でなかった回答者に対し、その理由を自由記述形式で求めており、得られた回答を内容ごとに分類すると、「嫁姑問題など祖父母と両親との人間関係」「相性・考え方の不一致」「物理的な接触機会の少なさなど関係の希薄」などが主な理由であった。また回答が得られた32件の自

由記述のうち10件（32%）は嫁姑問題が占めており、祖母と母親との確執や祖母から母親へのいじめ等を目の当たりにし、祖母に対して嫌悪感を持つケースが多く見られた。この結果から、祖父母-孫関係とエイジズムとの相関において特に女性に強い傾向が認められた理由として、定住家族における嫁姑問題が強く影響していることが推測される。女性にとって嫁姑問題は同性の争いであり、かつ将来自己も経験する可能性の高い問題であることから、男性よりも強く心理的負担や恐怖心また嫌悪感を植え付けられ、高齢者に対する嫌悪感が強まったことが考えられる。

5. おわりに

以上、本稿では、エイジズムの規定要因について、社会関係（人的ネットワーク・所属団体）、ならびに家族関係（夫婦関係・祖父母-孫関係）に焦点を当て考察を行った。分析の結果、社会関係のうち人的ネットワークについては、5カテゴリーにおいて負の相関関係が認められ、特に近隣において日常的に親密につき合っている人が多く、最も親しい人との接触頻度が高い人ほどエイジズムが弱まる傾向が男女ともに認められた。また、人的ネットワークが築かれる場となる所属団体の有無については、女性において有意な関係が認められ、積極的に参加・活動をしている所属団体を持つ人の方がエイジズムが弱まる結果が得られた。

他方、家族関係のうち、夫婦関係については、関係が良好であるほどエイジズムが弱まる傾向にあり、特に配偶者の能力や努力を評価していること、ならびに評価されていることと強い関係性が認められた。また祖父母-孫関係についても同様の傾向が認められ、関係が良好であるほどエイジズムが弱まり、特に女性においてその傾向が強いという結果が得られた。

本稿では、社会関係、ならびに家族関係を独立変数に、他方エイジズムを従属変数に設定して各変数との直接的な関係の強さについての分析を試みたが、両変数を媒介することが推測される変数との関係にまで踏み込んだ詳細な分析には至っていない。先述したように、自尊感情や自己受容といった変数は、エイジズムに影響を及ぼす重要な変数であると考えられることから、今後の課題

としては、媒介変数も含めた詳細な変数間の因果関係の解明、ならびにエイジズムの生成モデルの構築等があげられる。

注

- 1) Cowgill, D. O., "Aging and modernization: A Revision on Theory." in J. Gubrium (Ed.), *Late Life: Communities, and Environmental Policy*, Springfield, IL: Charles C. Thomas, 1974, pp.129-143.
- 2) Butler, R.N., 1995, "Ageism" in G. Maddox (Ed.), *The Encyclopedia of Aging* (New York: Springer), p.35.
- 3) Palmore, E. 1977. Facts on Aging: A Short Quiz. *The Gerontologist*, 17(4), 315-320.
- 4) 「満足・不満」「楽しい・辛い」など対義的な言葉を数直線の両極に添えて、数直線上に設けたいくつかの目盛りや数値の中から一つを選択させる方法。
- 5) Fraboni, M., Salstone, R., Hughes, S. 1990 the Fraboni Scale of Ageism (FSA): An Attempt at a More Precise Measure of Ageism. *Canadian Journal on Aging*, 9(1), 55-66.
- 6) 原田謙・杉澤秀博・杉原陽子他「日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成：都市部の若年男性におけるエイジズムの測定」『老年社会科学』26(3), 2004年, 308-319頁。
- 7) 原田謙・杉澤秀博・柴田博「都市部の若年男性におけるエイジズムに関連する要因」『老年社会科学』29(4), 2008年, 485-491頁。
- 8) 杉井潤子「エイジズムの構造と生成要因」『現代の社会病理』22, 2007年, 155-170頁。
- 9) この合成変数は、数値が大きくなるほどエイジズムが強くなることを示している。
- 10) 杉井潤子「なぜ高齢者を差別し虐待するのか」『老年社会科学』28(4), 2007年, 545-551頁。
- 11) 関根薫「現代日本におけるエイジズムと関連要因に関する考察」『人間学研究』9, 2010年, 27-36頁。

- 12) 奥村隆 『他者という技法 — コミュニケーションの社会学』 日本評論社, 1998年, 153頁.
- 13) Palmore, E.B., *Ageism: Negative and Positive 2nd Edition* (New York: Springer, 1999), p.66.